



岐山蘇林

目次

- ▲講演
白上本縣理事官
- ▲研究
果樹園設計
森林防火組合
赤松の造林
- ▲詞藻
史都めぐり
旅裝を解いて
草の上にて
義仲を弔ふ
夏の天地
- ▲通信
山林學校便り
會員消息
- ▲雜報
數件

(日十月七年二十四治明) (日五廿月每定)
可認物領郵種三第

(日五廿月每定)
行刊期

號七拾五第

日五十二月七年三正大

講演

白上理事官講演要領

本講演は去る六月十七日新任本縣理事官白上氏の
本校を參觀せられし際講演せられしもの之要領を
記述せしもの文責本より記者にあり(筆記者都竹)
予は久しく教育事業には遠く思はるる警
察事務にたづさわりしが、今回はからずも
本縣に赴任して教育の事に執掌するに到れ
り、蓋し何の職業たるを問はず、人たるも
のは己れが一生を棒くべき職分に對して眞
の理解を有せざればその職分に忠實なら能
はざるべし、數ある各種の職業中各人が眞
の解釋によりて天賦たるを自覺し、これが
爲には自己の最善を傾注すてふことは實に
希まじき事也。然るに世には己れの職業を
吾自ら悔りて不得止してうか爲につくし好
機好會だにあらば直ちに他業に轉せんと欲
するか如きもの焉んがうの職分に忠實なる
を得ん、例せば予か前任地東京市に於ける
巡查の如き實に萬衆侮蔑の色を以て之に接
する也、予は巡查の者が社會的に客觀的
に何か故に然るかとの解釋に苦しむこと久
しかりき、即ち世人の侮蔑に先ちて巡查自
身が自らを悔るにはあらざるか、世に尊き
ものゝ隨一たるべきは人の生命財産也。而
してこの尊きものゝ保護を司る巡查の職分

は、職業中第一の一流に倍すべきものゝ一
ならん、然らば巡查の如き職分を有する者
に對して世人は必ず畏敬の念を持つべき也
然るに事實は之に反せり、この理由は實に
前言の如く巡查その者が自己の職分に忠實
ならず、殆んど腰掛的の職分と心得居るに
依るなり、世人之を自覺し「ウーン巡查風
情が」とこのウーンは社會より與へしには
あらで巡查が社會に奉りしもの也。
この事實より予は悟れり原始時代の職業
なればいざ知らず、現今の分業時代にあり
て職業に何等貴賤の別あるなしされば吾人
は必ず自己の職業に對して光榮ある職業た
るを自覺すべきものなり、林學林業に志す
諸子果して這般の自覺ありや。
聞説く林業は吾邦刻下の急務なる職業也
と既に熊澤蕃山時代よりその急を認められ
るの所論中にも治水天候に關するものを散
見す、吾國年々の水害は實に夥し而してこ
の洪水はかのナイガの氾濫の如く決して利
益を伴ふものにあらずして幾多の慘害を逞
うしつゝありこれが治安の策としては植林
に若くものはなかるべし、徒らに土工の末
枝に走らず本源たる水源を治むべき也、現
時中等教育を受けし輩にもこの觀念之しく
して森林を濫伐して治水を省みず國民をし
て公安上の自覺をなさしむるは偏に諸子ら
の責任なり、蕃山の説には植林によりて天
候を左右し得るとあり、誠に人間として自

然を支配するに踰ゆるの愉快あるなげん、見よ雷公を驅使して車を走らせ火をともさす等を諸子は如何と見るか、この点より考へて水利を調へ自然力を制す諸子の力や大と謂つべし、宜しくこの理想に向て満身の力をもてるの職務に當るべし。

諸君の既に知るか如く吾邦は山の國也故に吾國は將來の山に向つて力を注がざるべからず、諸君はその方面に向つての眼孔を大にし大なる天職たるを自覺して進むべし、今や林業の前途は實に洋々たるものあり。

次に予の述べんとする處は本校卒業生の活動方面に關し所謂世渡りの道てふことなり、學校と社會は實に密接にして學校によりて蘊蓄せし處の智徳を實際に活用する處はこれ社會也、この學校をよく發揮せんには處世の道を心得ざるべからず、本校生徒諸君中には他府縣人少からざる由なれども大部分は長野縣人即ち信州人也而して今日一般の世評として信州人は議論多しとの意見あり、事毎にその實行に先ちて何彼と議論あるは好ましき事にあらず議論多しとは信州人の長所にしてはた短所なる也、議論を排戦せられてこれに對し折伏を企つる底の議論辯舌は望まじきも何事にも敢て議論を挾む所謂議論好きに到りては恰も囊中に錐を藏するが如く頽脱の時を知らず又對手をして常に好感を抱かしむるべき所以に

あらず、諸君は世人か悉く大度ならざるに留意せざるべからず、錐に限らず劍にても然り劍は鞘に收めて身を護ればこゝら價值あり無暴に人を斬るの不可なるや論を俟たず彼の支那にありて周の末群群起りて天下亂し秦の始皇帝これを統し世も二世胡實に到りて政を失ひし時快漢項羽は拳兵連戰連勝の勢なりしかど彼は實に自己の勇武を恃みて大將にも似ざる陣頭の功を誇りたりこれ誠に匹夫の勇なりきさればにや遂に漢の高祖の爲もろくも九里山下に亡ばされたりしも項羽にして徒に劍を好まず自重以て事にあたらば、天下或は如何になりしか、知るべからざる也、外人か日本人を評して日本人は戦争好きなりと言はば不利此上もなからんされど日本人は戦はざるべからざるに到りて奮然起りてと言はれば前言と

その差違やいばかりや、これと同様に信州人たるものも少しく世評の那邊にあるかを顧慮せざるべからずされどあまりに顧慮するはもの主義を没却し決斷の力を失はしむるあるに心すべし自らの高として毫も世態人情を顧みざれば屈原が汨羅の水に投せしか如きに到るやもはかり知るべからず。

要するに予は諸君が自己の天職を樂しむ學理と世態とをよく調和しるの間に由りても決して理想の光を失はず以て圓滿なる人格と平和なる生涯に入られん事を希望する

もの也、諸君は學窓にありてよく社會を觀察し味ひて他日校を後にせし際は十分に其蘊蓄を發揮し活動せられん事を望む以上

果樹園設計書 (其二)

晴耕雨讀生

五、肥料 飼養の耕馬及び豚鶏等より生産せる厩肥及び鶏糞等を利用し施用するも到底全部に供給するを得ざるを以て金肥と隔年交代に用ひ又金肥と此では大豆粕過燐酸石灰骨粉完全肥料等適宜施用せり

然して本園は時霜の被害甚だしき爲め其折豫防覆蓋の作用により樹勢の損するを以て其の恢復の爲め多量の流酸アンモニアの如き速功性肥料を供給せりと云ふ然して又各果樹一本平均(九年乃至十年)拾錢位の肥料を要する割合なりと云ふ

六、病虫害 葡萄の恐るべき病虫害すかしは比較的少し之れ年々種技更新法の仕立法を採れる故ならんか、其他黒點病は種類により其の被害少からざるも三四回の「ボルドー液」注射に由り豫防を行へり

星病の被害は未だ少なけれども極力豫防に勉め石灰ボルドー液の注射數回行へり其他赤星病腐爛病は其の被害少し又虫害としては貝殼虫蚜虫等の被害あるも石灰硫黄合劑を使用し驅除を行へり

ロ 萃 果

梨と同様其の被害の著しきものなし腐爛病及び赤星病等あるも其の被害少なし前同様ボルドー液の注射により豫防し居れり此地は土質排水不良なる爲め紋羽病の被害あり其他虫害として綿虫の害あれ共東北或は長野地方に於けるが如き慘狀を認めず、又貝殼虫毛虫天牛等の小害あり此等の虫害を豫防する爲め前全樣硫黄合劑等を用ひ居れり尙當園に於ては本年より試験的に各樹に對し地上主幹部約一尺位を藁を以て被ひ害虫の潜伏所とし以て一掃を計れり

ハ 桃

本縣桃の主産地たる三岡村地方は明治四十二年以來恐るべき炭疽病傳播し多大の損害を被りしが當園に於ては未だ其の害を認めざるもの大に豫防警戒を成せり其他縮葉病の被害比較的多きもボルドー液或は石灰硫黄合劑等によりて豫防に勉む

七 氣象上の損害

當園は本邦高原の中央に位せるを以て海洋の影響を受けず従つて氣候大陸的にして時に近寒を呈し尤も恐るべき晩霜の來たるありて計らざる大損害を被ること多し一昨年

め如きは一朝にして大和氏經營の桔梗葡萄園と合し千餘圓の損害を被りし事ありと云ふ、故に極力此の害の豫防に勉め近來葡萄園全部各樹に對し藁を覆ひ其の被害を豫防せりと云ふ

八 經 濟

然れ共斯かる大面積の地なるを以て到底應急に全部覆蓋せしむる事能はざるを以て止むを得ず晩霜被害期は連日覆蓋し居る爲め若芽を蒸害せしむる事少なからず故に之れが應急策として速効肥料を以て成長を促進せしめ居れり尙往々來たる風害の爲め經驗土近來剪定法に意を用ひ結果枝を短縮せしめ風害を少なからしめ居れり其他稀に五六月交葡萄開花期日に當りて霖雨の害を被むる事ありと云ふ

一、地代 前記の如く芳川村の部落有芝地に三十箇年の契約を以て借入れ借地料坪二厘五毛六ヶ年間歇下年期とし無料とせり故に借地料甚だ低廉なるを以て現市價約七錢を以て購求し經營するより利益多しと云ふ

一、労働 現在植栽面積七町歩之れが經營常夫として七人を僱入入れ置け其内絶わす休むものあるを以て一町歩に付き約一人半を要する割合なり又臨時袋掛其他除草等の爲め僱入れ其の労働賃銀一人前男拾五錢女拾錢乃至貳拾

五錢の割合なりと云ふ然して之等の常夫は年中耕耘施肥剪定等の作業に従事し農閑即ち外業能はざる一二月の候には専ら袋張竹細工肥料製造等に從事せしめ居れり

收 支 計 算

當園の調査によれば各種果樹を通し平均一本に付き二百個を結實せしめ一箇に付き労働賃銀肥料代其他の經營費を合算し四厘の支出を要する割合なる故一本に付き平均八拾錢の利益を得居る計算なりと云ふ然れ共不時の氣象上の損害即ち霜害風害霖雨等或は病虫害の猖獗を極むる等の打撃を受け販賣の法宜しきを得ざる等の爲め豫期収益を擧げる事能はざる事もありと云ふ

九 現在及び將來

當園は前述の如く自然の要素たる地理學的位位置尤も宜しく中央線村井驛を去る西方六町餘の地にあり故に其の生産物は運搬に便にして經費少なく尤も好都合なり加ふるに松本市場を去る南方二里餘の地なれば經營に必要な物品の購買に便利多く又全地方より本園に一日の清遊を試むるもの多く意外の客を引き生果の小賣販賣を營み梨葡萄の如きは半ば之れによりて費消せらるると云ふ尙本園は數種の果樹を混植栽培し居るを以て桔梗ク原葡萄園の如き單に一種のみの植栽營にあらざるを以て一方の果樹の種類の大打撃を受くる事あるも他方の果樹により

て補ふを得經營上安全なるのみならず勞働分配上宜しきを得甚だ好都合なりと云ふ加之本園の監理者大和秀夫氏は其の技術に堪能なる最近の學理の應用と經驗により之れが經營に従事しあり今日の隆盛を見るに至りしなり

蓋し本園の今日あるを致せしは以上自然的恩恵たる地理學的的位置の尤も有利なると混補經營組織の接排宜しきを得たる又監理者其の人を得たるに他ならず

尙將來或は病虫害の猖獗或は氣象上の障礙或は商的經營の失策によりて猶幾分盛衰浮沈免れ能はざるべきも之等に大に注意し被害を未發に防ぐに勉め商的經營宜しきを得ば蓋し將來尙一層有望なるべし

然れ共將來は生果販賣によりてのみならず之れが加工業を擧め桃のジュリー等のジャム等のみならず或は罐詰の如き果酒(主として葡萄酒製造等)を經營上加味せば一層有利なるべし

森林防火組合に就て

高橋 會山

ヂャックギートン氏より
拜啓我ガオレゴン州の防火組合が従前ならば當然燒燼すべき大森林の火災を防禦したる事實と効績とを紹介致し度く茲に一書を呈し候

近年各地方共アタラ天物を暴殄するを防がざるべからざるを悟り夫れ規則を制定し又は防火演習をなす等々が注意を拂ふ様に相成候段は御同様に慶賀の至りに存候貴園にありて年々巨額の天産物を燒き棄つる由を聞き及び候又貴縣に於ても被害高年々數万圓に上りせるとかぞして只今にては之れが防禦の手段として府縣令や告諭等を以つて豫警の手段とせらるゝ由夫れは未だ消極策と申すべく候尤も我米國とは總てを異にすれども以下の筋書を斟酌して更に一步を進められん事を祈上候

蓋し我國の防火組合も本組合が其の嚆矢とも申すべく従て未だ大なる功績を遺したとは申し難く候も亦以て他山の石たり得るを信し申候而して其の依て來れる經過を質さん始め十二名許りの森林所有者より成りたる一團の効績が今日の大を致したるものにして又明治四十三年に於て僅に四十一名の會員なりしものが今や十七万六千町歩(約十里四方)を有する二百九名の多數となり此州に於て稀に見る天然の大財産を作りしと稱せられ候

尤も四年前創立以來監督ヂェーコソラッド氏の絶大なる勢力と犠牲的精神とは預つて力あるを見逃す事能はず候、此組合の創立以前を願れば年々七百七十有室に連結さるゝ程の木材を燒き盡し其の際には各森林所有者は自分勝手な行動をとり無益に猛火と戦

つたものに有之候、然るに昨大正二年度に於ては何等の燒損らしき燒損を見ざりしに徴しても其効果の程御推察願度し之れは即ち次の如き理論上より見るも整然たる動作の出來得るものと申すべく候

夫れは先ず三階級の衛舎を設け其本營には監督コソラッド氏が控へて常に注意を八方に配り居候其次位にある中營は此州の各地樞位に設けられ其次に最支派なる派出所にして各地に多數散在致し居候

而して一朝發火の兆あらんか先づ近接せる派出所より直に本營へ急報し尙ほ臨機の處置を採るべし又電話線は約五十室に亘りて設けられ之れは直に農民の部落に通する仕組と相成居候て發火の際は何處よりの報告も直に本營より支派の各所へ傳へらるべく候組織の主要は右の如く又此組合が農民の防火的知識の啓發に盡瘁せるは實に至れるものに有之候尙コソラッド氏は本務の傍ら州の學校に教鞭を取り専ら對火戰闘の趣味鼓吹に努められ候尙此組合の費用は極めて少額にて足り如何なる會員も個々に防火法を講ずるも甚だ廉價にして且つ其効果一屬確實に有之候而して該組合創立以來四年間に燒失を免れたる木材の價格は實に一億萬圓餘に上り此事業は次の危懸季節には尙從來に比し以上の功績を擧げん事を期し居り候

赤松の造林は有望なり

三年 紫山 生

木曾は昔木祖と言れる處であつたが和銅年間中仙道を開き以後漸次樹木を伐採し今より三百年前即英雄割據の時代に至りては畏くも神宮御造營伐をも伐り出され越へて天保年間に到りては諸方に於て益々木材の伐採量を増し弘化年間には村落に近き大部分の森林は殆ど廣測たる原野と化し原生の状態を保てる森林は眞の深山幽谷に入らざれば見るを得ざる位になつた加ふるに世は廿世紀となり交通運搬の便大いに發達し木材の社會一般に於ける需要供給の道甚擴張せらるゝに到つては流石の木曾も永遠に木祖となり得るといふことは信じ難い事實である

愚なる余の察する所によれば現今又進んで今後と雖特別なるものゝ外は社會一般を通じて木材の供給は多くは其の品質の優美なるを好まずさりとて劣悪なるを望むにも非ず必ずや中様なるものが其數に於て最も多いであらうと考へられる

思ふに檜は古來樹木の大王として認められ材質優良美麗にして又材價の高き事も大王である然し其の造林困難にて又其の保護撫育も難し加ふるに成長遅緩にして成林に長き年を要するに依り材の高價なるに比し利益が少ない而るに是等の点より見たる赤

松は如何今しばらく其の造林保護手入及其の林價並に其の副業に付て述べやうと思ふ

一、造林及保護手入 赤松の種子は強健で且強大なる翅を有するを以て長距離の所を飛散するを得以て天然下種造林をなすに適すばかりでなく地味劣悪なる赤裸岩上にも育つ事ができ又虫害を受ける事が少なく僅に松毛虫の害を受けるのみなるが之も大なる事少なし加之幼時成長盛にして特別の保護手入を要する年間短きを以て通常天然下種造林をなさんとする時は粗略なる地拵をし下然に下種の出來たる翌年の夏發生せる苗木を中心とし直徑二尺位に下刈をなし其の明年又直徑三尺位に下刈を行ひ其の明後一回總刈を行ひ是にて下刈は充分なり而して苗の厚き所は抜き薄き所は天然苗を以て補ふ人口を以て苗を仕立つる時は苗圃にて作りたる三年生又は二年苗の大なるものを之に充つ下刈は植付後二乃至三年を要し以後天然下種とも適時に間代抜打を行ひ以て全く成林するものである

- 二、林價 今牧部技手の御談に依れば赤松の林は面積一町歩に對し通常の村地に比し
- | | | |
|----|-------|--------|
| 年令 | 材積(樺) | 立木山本相場 |
| 二〇 | 八〇 | 二四〇 |
| 三〇 | 一五〇 | 四五〇 |
| 四〇 | 一九〇 | 五七〇 |
| 五〇 | 二二〇 | 六九〇 |

但一柵は千把木六十束にて千把木とは長尺三寸の木を長四尺の夕がにてしむるものにて停車場差一束拾錢内外のものとす

而るに赤松は四拾年生に到れば平均直徑一尺内外にて五拾年生にては平均直徑二三寸内外と成るを以て用材として使用すべくこの四五拾年生を伐採すれば約一千圓内外の收入あるべし今檜伐期を百年とし赤松伐期を五拾年とし之を比較して利益を計算するに檜一更新の間に赤松は二更新を行ひ得べし而して兩者の造林費及撫育の費を差引くに百年間に於て赤松は檜より約一千二百圓の多き收利あるものなり

以上は一林に付きての價なるが之を一樹に於て見れば年令百七十年胸高直徑二尺八寸樹高拾二間枝下七間なるものは約五拾圓年令二百年胸高直徑三尺一寸樹高拾五間枝下八間なるものは其價約百圓なり又一枚の板に付きて見るに大正二年度にて松板普(巾八寸乃至一尺、拾三尺、長六尺にて)約一圓無節ならば約一圓六七拾錢である

三、赤松特有の副業 松茸栽培は赤松特有の副業なり松茸は杉林中の地味悪しき火山灰土の礫少なき土地に生し七月の初より秋に迄續出するものにて其の價格は其の初期は一百匁約一圓にて盛期は約二拾

五五銭なるに依り年平均約三拾銭位なり其の出高は一反歩に付て一年間に約二貫目促とすれば一反歩より一年間に約六圓位産出する譯である

結論 斯の如く作業簡單にて利益の多い赤松は地味の最も適せる木曾に於て其の造林を行ふ事は民間の小企業として又町村の大企業としても有利な經營が出来様かと思ふ



詞 藻

史都めぐり (二)

旅行記の中より 三年 翠村 漁郎

佐殿の墓所を後にし、道を鎌倉の宮にと、路傍に一札あり、執権高時宗族郎黨二百余人同じ枕に伏せし東勝寺八町なりと、淫虐横暴の彼ながら、最期の地と聞けば、何やらん物悲しき、天の罪を憎みて人を咎めずとかや、彼も時めきては簾府に擬し弓矢一門の棟梁たりしにあらすや。

早や鎌倉之宮に着きぬ、華表上の扁額は先帝陛下の御宸筆とか、申すも畏こき極みなれ、社格は官幣中社にして、大塔宮二品親王を奉祀す、社殿に何等の裝飾なければ

瀟洒たる裡、神威自ら詣者の頭上に打ちろゞさ来るが如し、祠後に宮が幽せられ給ひし土牢あり、金枝玉葉の御身にして如何なる御運の末そや、此處二階堂の山懐に幽閉せられたまひしよ、早速非にして、暗雲天日の明を掩ひ、天下に寧日はあるべくもあらず、宮は日の光さへ及ばざる、この牢窟の中に無限の幽憤と、絶大の經綸を滿腔に抱きたまひて、如何ばかりか西天を睥睨し大息し給ひけん、一下する逆徒の毒刃に春秋未だ富めりと謂つべき二十有八の玉の緒を斷ち給ひし、御無念さ！天何ぞ親王を恵むに薄き！淵邊が御首級捧げかねて棄てまゐらせし數も數歩の外にあり、思ひ廻らせば、苦腸九廻、一として切齒扼腕の種ならざるはなし、天下の青年よ來りて此處に立て、而して汝が血にして躍るあらば、汝が誇負せる大和魂が汝の胸奥に磅礴積せるを覺るべし、黙々たる間はこれ多感の時なり、多感の時はこれ覺醒の瞬間なり。

芳山に御魂香しき花帝を偲ひ、坐る當年に暗涙を瀧さしものは、來りて多愁なるこの宮に詣てよ。

史都の五山どうたはるゝ、建長圓覺の二大禪林を訪はむと欲せしも、日己に暮に近く、脚亦終日の跋涉に稍ひるめる色あり、電車に投じて歸り、宿舎に憩ふ。

浴槽に一日の疲勞を遣り、夕食を喫し直ちに薄明をついて海岸に到り、夜景を賞せ

むとす、透々たる長汀に蜿々たる湖は刻一刻押し寄せぬ、夕風も亦陸に向ひて軽く吾が衣袴に叩きぬ、耳うち傾ければ、夜の神は大海原の秘曲を奏でつゝ、漁り火の海を焼くわたりにゐますかの如く思はる、遙に幻影のきらめくは返子ならむか、落日の余光だになき大海と大空とは、颯風の前の如く、暗愴として、また黝々、灰色の如くしてまた黒汁の如し、分又分、秒又秒潮は此方へ々々へと押し寄せ、灰黒の色はいよゝ濃く、水天明滅して、夜の帳りは滿目の何物をも掩ひつゝ遂に水天の一髪を葬りぬ。

天に月輪のかゝるなく、星さへ疎らなり明日の空摸樣既に己に心元なし、磯に碎くる浪の時に白沫あるを見るのみ、うれすら且つうすれ且つさだかならざるに到れば、漁火の長き影は波を踏みて燦き來りぬ眼を反せば四圍に光なく、かたへの友さへその在るをいぶかりて思はずも高く呼びぬ、願はくは、望前に來りて金波の彼方に銀波の遠方に一輪圓滿の玉兔を見るの日あれかし。

仰げば天際ばるかに、いとく、小き星一日の愁思を慰むるが如く煌きぬ、星よ星よ語れ！史都の今昔……を吾れに……

碩々たる白砂を蹴つて宿舎にかへる、史都は流石に静か也、事毎に物毎に風雅に、覺ゆるのみか湘南の地は夜氣すら温雅に、

わが官能に觸るゝなれ「湘南より」或は「史都にて」と署して家郷の知己へ秃筆を呵すれば、悲しく又憂き懐古の情緒は筆端に迸りてあやしき迄の數通をにちりぬ。

范々七百年、江山依々として、夜色の蒼然たる裡に安らげき眠りを結ぶが如く、而かも史を語るにあらず。唯さすらひの人によりて、深刻なる古今の感をなさしむるのみ、史に豊かに詩文に富める史都鎌倉の一、夜はいよゝ開け、枕に通ふは昔ながらの風聲濤韻のみ。

旅装を解いて

二年 由 緑 生

五月拾九日……「御飯が出来ましたから」と云ひつゝ宿の男が遠慮會釋も無く眠い面をしてゐるのも一向構ひなしにせつせと床を片付ける。寢耳に水と云つた様にばかりとして居る皆の顔にはもう疲勞の色が溢れてゐる、夜は明けたに違ひない、仕方が無いから口々に愚痴をこぼしながら洗面所へと向つた。長い間の旅を終へて今日これで歸校するのと思つた時嬉しい様な、又都會の賑ひから離れねばならぬと云ふことが何だか淋しいやうな氣がした。これ以上旅が續いた時私等にはもう見る氣にも、聞く氣にもなれなう……から私は思つた。

出立の準備が出来ると人々は三々五々相ひ打ちつれて旅のことも語りつゝ程遠からぬ萬世橋停車場へと歩を進めた。朝が早いので電車はまだ走つてゐない、紅塵万丈といふ様な都會の天地にも晨の眺めは心地よい。

お茶の水橋や女學校で名に聞けたお茶の水も市ヶ谷も、憲昭皇太后の御大喪儀を行はせらるゝと聞いた代々木ヶ原も只眼を擦る間に過ぎて青い麥と櫻林の多い郊外へと飛び出した、赤羽でほんとの汽車に乗り換ひて、もう浦和も煤煙漲る大宮驛も過ぎ去つて此處は紫匂ふ武蔵野の中央である。

樺や榛の木で圍れた農家の庭が生垣を透して見わたらう、白い鶏が花の向ふや垣根の蟲を頻りに探してゐるだらう、強い黒土の香が鼻をつくに違ひない、けれども車上の旅人には此等の景色を思ふ存分風味する事が出来ぬ、急行列車は知らぬ顔して、范々たる平野に煙を残し轟然たる響を立てて走る。

紫生よと聞く野の蘆荻のみ高く生ひて馬に騎りて弓持ちたるする見ぬまで高く生ひ繁る(丙辰紀行)

とある光景はもう何處にも無い、何處も見渡す限り田圃と變つて了つて居る。

熊谷直實の城趾と熊谷寺とで知られた熊谷を後にして新町近傍からは妙義の劍峯を望み、青い桑の葉を撫でて來る生温い初夏

の風に送られて高崎に着いた。ここは正長元年に和田氏の築いた和田城下であつて現に歩兵第拾五聯隊が置かれてある。横川よりは名に負ふ碓井の天險十五分の一の急勾配をアプト式列車に依つて踏破する、一步は一步爪先上りになつた、山は迫る。

溪川の流、山の姿など四山の春光筆紙に盡し難しども云ふか武拾六の隧道を悠つくり潜つて出ると吾々は最早信州へとは入り込んだのである、碧の空、緑の地、聳わ立つ四方の連峯は、ちやうど藍青の幕を引き廻らしたやうである、太陽は眩ゆい光を信濃高原に投げ出したではないか……

輕井澤！輕井澤！驛の人の呼ぶる聲に「車中に寝れる旅人は夢から醒めた、たゞ輕井澤よ、全く謳歌せんとする輕井澤よ、あの黒い山、あの黒い野、あの黒い森、今日此頃點々と青葉隠れに別荘が散在し、街には金髪洋装の人も行き交ふて居るだらうに……」と或人の云ふたのを思ひ出した。

寝つてゐた爲めか私にはろんなに深い印象を止めはしなかつたが尙美しい山地の落葉松林は兩宮氏の殖林で、平地は桂公の殖林で防火線は模範になつて居るぞうだ。驛を少し離れて兩宮氏と桂公との銅像を右に見て沓掛に着いた、追分節で名高い追分あたりから小諸邊りへかけて殊に信濃高原の氣分を味ふに最もよい男性的な淺間の噴煙には思はず車窓に快哉と叫ばずには居られない

かつた。

さや／＼と清々しい南風が吹き渡ると、
麥緑が濤のやうに揺ぐ、桑園麥圃の間を二
條の銀河が流れて居る、甲信兩雄の戦史を
語る千曲、犀の兩川の合流する所が即ち川
中嶋である。曾て此處に決死の花武者が入
り乱れ、夏草の緑も紅に染んだ永祿四年の
九月拾日を偲べば惆悵追懐せしめてやまぬ
目を轉すれば、松本平の西方信飛の境上に
聳ゆる日本アルプスの雄姿も手に取るばか
ら……。

信州人士の謳歌する佐久間象山先生の生
地も俯瞰することが出来る。信州高原の光
景は眞に壯絶である。篠ノ井驛に乗り換へ
て長野へは間も無い。只々善光寺に來る旅
人は忙しうに、刈萱堂を訪ふて、又忙し
げに過ぎ去るであらう。

九州筑前國司加藤左衛門佐重が、世を憐
み剃髮して等阿法師と稱し此地に來りて往
生したるの地とか堂は往生寺山の南腹に在
る。此處で目に立つものは何もない實に善
光寺は此地の生命であらう。

姨捨の里を過ぐる頃、夕陽がバツと映ね
る、雨後の透徹した空氣に紺青の山清く白
雲の閃輝、車窓を射てボカ／＼と肩が温い
溶々たる千曲、犀の心地よい兩川も眼下に
見おろす事が出来る。此處は觀月の勝地と
して名高い姨捨山がある。
倅や姨ひとりなく月の友 (芭蕉翁)

毎年陰曆八月十五日には臨時觀月列車
の發するあり。詩人墨客の群集するも
の堵の如く、月見堂より善光寺平を隔
て、遙に鏡臺山の明月を仰ぎ詩を詠
す。(信濃案内)

と今も昔も變りはあるまい、姨捨驛を過
ぎると冠着トンネルである、延長實に八千
七百十四呎、中央線中の最難工事である、
文明の恩澤は知らぬ間に夢の如く過ぎて麻
績驛に着く……。

春の永き日が蒼茫として暮れかゝる時、
汽車は明科驛を過ぎた、高原の夕方も亦心
地よい眺めの一つであらう。松本驛を過る
と日はもうトツブリ暮れた。

村井―埴尻兩驛間は所謂桔梗ヶ原で、天
文十二年武田信玄と小笠原長時の軍勢が闘
ひ旌旗亂れし古戰場ヶ原と聞く、ゴウ／＼
たる流車の響に信玄を偲び、長時を偲ぶ、
南北三里東西三里、目下大半開墾の緒につ
き居るも、猶は秋は蟲聲當年の倅を忍ばし
むるとか、加藤宇万伎は歌つた。
武士の草むすかばね年ふりて秋風さむ
しきちかうが原。

一行を乗せたる流車は木曾へ、木曾へと關
路を走る。窓外を眺むれば、星斗の光が物
凄く光るばかり……。
敷原、宮の越の聲聞きては坐懷さに絶へ
ず眼目を擦つて下車の準備の取りかゝつ
た。やがて起る一聲の汽笛は木曾福嶋と云

ふ間もあらせず燈影星の降るが如き我等が
町へとは入つたのである。時は正に十時に
垂としてゐる。愛情溢るゝ諸先生の御出迎
を受けて心に深く感謝しつゝ懐しき一年生
諸子に圍れて土産話を花を咲せつゝゆかし
き母校の門を潜ればこゝに希望に充ち満た
された一句の修學旅行は終りを告げたので
ある。(旅行日記より其一節)

草の上にて

三年 信天翁 生

○美しい初夏の野よ。しなしなした青葉は
白い葉裏を見せながら何をか自分に語つ
てゐるよ。柔かな草は静かに揺れて幽に
吾に私語くよ。静淑らしい花は床しく語
つて無限の愛を吾に寄するよ。青葉をな
ずる色ある色ある風はキナスの秘言を吾
に傳ふよ。

あゝ美しい初夏の野よ
○あれあれ鳴るよ鐘の音が。力なき鐘の音
が――

青葉の蔭に半夕雪に焼かれて寂しく立つ
破れし寺の樓から。衰へ行く老僧の手で
――
沈んだ空氣を震はせながら、美しい葉末
をゆるがせて静かに――夏の野を――もう
黒ずんだ緑の山へ――つきぬ哀愁を萬象に
告げて――

あれあれ消ゆるよ鐘の音が。力なき鐘の
音が――
○寂しく舞ふよ、憐れな胡蝶は、暮れ行く
初夏の野に。憩ふ宿なく逍遙ふよ。
憐れなるよ彼の蝶は、無限の愚樂を受け
やうと美しい夏の宮を訪れしに、何等の
無情が！ 夏姫は斯くも憧憬る、彼の蝶
に何等の笑ひも見せなかつた。優しい
白百合さへも床しい番を送らなかつた。
憐れなるよ彼の蝶は、獨り暮れ行く野に
泣くよ。

義仲を弔ふ

一年 小澤 武

壽永三年正月、満日蕭々たる粟津が原、
悲風漸瀝として人の腸を九断せすんば息ま
ず、宇治瀬田の備もろくも潰れて、湖畔を
西に落ち行く武者一騎あり、嗚呼是昨日は
天下に覇を稱へ、勇に誇りし旭將軍義仲の
末路なり、彼が胸中果して如何。

幼にして父君を失し、壓迫強かりし當時
を、纔に義人の紅涙に藉りて身を以て木曾
に通れ、剛壯なる氣は年と與に光を放ち、
武將たるの資は日と與に揚りぬ。

我嘗て聞く「蛟龍は池中に在りて勢を養
ひ機一度至れば乃ち雲を呼んで昇天す」と
彼又然らずや、久しく養ひし潛勢力の、
いかで大活動大活劇を演せずして息むべき

憤怨を抱いて薨と給ひし以仁王が令旨は
實に力が原動力なりき、而して記憶すべき
治承四年は、實に之が發動の年たりしなり。
一度木曾の谿谷に白旗を翻してより、勢
は旭の如く、一戦は一戦に依りて其の武を
示し賞を揚げ、管龍騰の旅行く所攻めて抜
かざるなく撃ちて略せざるなく、北國爲に
屏息し折鐵爲に振動す、見よや幼時の恩義
を懐ひて實盛が白髪の前級に落せし紅涙を
聞けや俱利伽羅の一戦に執袴子を踏破せ
し剛勇を詩歌管絃の遊に耽り永歎の余哀に
馴れたること久しき平氏輩の、焉んぞ鋭き
彼が矛をひ得べき、翠葉搖々として西に
向ふと歌はれし、彼の悲壯なりし都落は實
に彼が突進の結果なりき。

想へ壯なりし宇治の戦、東軍は河を擁し
て其數三萬、西軍は之に對して纔に數百騎
彼は逆鱗の勇ある義經を戴けば此方は勇猛
なる義仲將たり、當時に於ける所謂代表的
武將はかくして骨肉弓箭の裡に見ぬ、兩
軍の挟む宇治の流は滔々として渦を捲き、
射交す征矢は鏗として響あり、激戦又奮戦
壯絶又快絶、東軍銳利なる矛おつとれば西
軍の堅實なる盾もて應じ、攻防甚だ急にし
て刀槍は火を發し碧血は流れて河を彩る。
されど地の利を得て天の利を得ず、寡は
遂に衆に破られたり、義仲終に起つ能はず
粟津原頭の薄氷と俱に消へしことのいかに
哀れなるよ。

夏の天地

一年 平田 晩村

夏は來れり、平和の天地活動の世界自由の
夏は來れり、五彩七色麗しく織りなせる浮
綾織の春の光は、眠る胡蝶散る花消ゆる霞
と諸共に、霏々たる春雨に誘はれて、徐に
かくれます佐保姫の御輿の後につけり。
夏は來ぬ麗明なる光は流れ崇巖なる緑は深
く幽邃なる泉は溢る、ろこに自由の影は宿
り、ろこに慰安の姿はひろみ、ろこに活動
の色はこもれり。た、樂しき夏よ今我世に
訪れ來ぬ。夕立晴し夏の夕まぐれ、浴衣の
袖輕くろよ吹く風になぶらせつといと清け
き野邊に遊ばすや、萬丈の紅塵撥盆の雨に
一洗されて、一芥一塵の名残も止めず、清
明なる日光に徹透する深緑の色鮮かに麗は
しく、葉々悉く緑色水晶の珠を鑲め、金剛
石の細粒を宿し、翠風靜に來るれば零々
と相觸れ珊瑚として落ちて聲あり、此の夕、
自然の母の乳の如く、滾々として沸き立つ
泉のほごりに佇まんか、神氣縹渺として吾
は泉に融合せんとし、恍惚として陶然酔ひ
るが如き一瞬自然の神が慰藉の懷に投せし
感あらんあるは、潺湲として五彩の波紋を

織りなす小川の岸に逍遙はんか、爽氣自づ
と身邊に生じ、神靈轉模糊として夢の如く
幻の如く、恍然として無念無想の一刹那、
煩悶懊惱全く消は失せて、胸中とみに軽く
奈何にすが／＼しからんに、嗚呼余は斯く
まで清素幽遠なる夏の夕暮を好む、余は信
ず、夏の御神は怒れば天地も震ひ、笑へば
稚兒もなすくべき、漆黒の蒼蒼ある勇神な
らんと。

誰か夏に炎暑の苦ありしと云ふ、さなり夏
には炎暑酷暑熱の苦あり、されど爰を知ら
ん、緑樹清泉のほとり、ここに解すべから
ざる快味溢れ涼氣満つるは、悉く炎暑の恩
眷ならんとは、而かも思へ、蒼鬱たる蒼樹
蒼蔚たる緑草、是等皆炎帝の恩恵によつて
我が世には生みだされしものなる事を、由
來愚者あつて賢者は知られ、濁酒あつて甘
露は味はる、涼暑六月甌中に坐するの苦を
知つて、初めて緑蔭清泉の無限の清趣津津
雲の如く油然として湧くを覺ゆるなれ、是
を觀れば炎暑は即ち神が人生に恩樂を興へ
んがため一方便たるにすぎざるなり、徒
らに鑠金の炎威を患ひ矯屋の中に閉居する
を止めよ、大自然が賦興したる青葉の山か
げ、漣波の岸邊、湧泉のほとり脱俗の仙境
は都に鄙に海に人待ち顔なり、されど世俗
は、炎熱の苦思はよく解し得るも、未だ裡
面に無限の恩樂、無限の清趣の溢るるを知
らず、愚なるかな、ひざ行かん涼風吹いて

葛衣涼しく、柳風に隨つて靡く小川の邊に
滿木綠深くして月光を渡り冷風底より起り
て涼さながら水の如き綠蔭にたゞ樂しき夏
よ、吾は汝を愛す、汝は活動の生自然界の
天地にして且つは絶好の詩壇なるよ。(終)

雜 題

一年 平 田 晚 村

高山の頂にあるいしころの我にし似たる淋
しさを見る。
御嶽山千歳の杉のすぎむらに名残りといひめ
て晴るる霧かな。
身にしみて冷たき事を覺る夜のくさにつゆ
あり露分けて行く
一切の涙知らずすぎて來し蜂の巢に似た
る我心かな。
蛙鳴く無益のやうに蛙なくたゞ大なる無益
のやうに。
書く事の四五日のち怠りぬあぢきなきか
なかる思出。
後つて走る舟こそおかしけれ君と吾との
河逍遙に。

通 信

山林學校便り

六月廿六日三年生一同は内教教授囑托友

會員消息

- 長部兵治君は今同青森縣林務課より岐阜
縣に轉任縣廳第六課勤務を命せられた
- 市川豊治君は上田小林區署に在勤の處六
月卅日森林主事に任下茨城縣石岡町小林區
署任勤を命せられたり
- 歸郷又は通過の途次母校を訪問せられた
る卒業生諸君左の如し
- 齊藤 海藏君 小羽根安治君
- 長谷部兵治君 河嶋 憲一君
- 原田久保作君 脇田 義正君
- 柏澤 國治君 宮入 汎省君
- 脇田義正君は家兄病氣看護の爲先達中歸
省の處不幸にして家兄死亡せられたりと聞
く君が胸中悲み推するに餘あり

誓程一千日 (五)

會 山 子

○六月號の林友を見て
我が文に誤植の数が十一字
世に醜きものと人は云ふなり
○近き十數年に於けるレコード破りの熱き
日に
班尾山麓に草分け上りて
天日焼け付く、草むれ被ふる、汗は玉なす

右に就き七月九日午後一時半安藤校長は全
校職員生徒を講堂に召集し夏季實習の意義
精神に就て縷述し尙夏季衛生其他風紀等の
點に關して委曲注意する處あり終つて實習
主任北村教諭より作業上の心得につきて注
意する處ありたり

○七月三日福嶋町馬市の爲出張せる本縣畜
産技師岩田勇氏來校せるを以て校長より講
話を乞へるに氏は毛付市及び林業と畜産と
の關係に就て約三十分許講演せられたり
○七月十二日 札幌農科大學教授新嶋林學
博士は同大學生十六名を卒ゐて正午來校視
察せるが安藤校長演習林に案内尙長野縣の
林業狀況に就き説明の勞を取られたり尙同
博士の一行は本校演習林、木會支廳等を視
察し福嶋に二泊の上關西に向け出發せり
○七月十三日 愈々實習に着手す前日來の
雨天も拭ふが如く霽れて眞に實習の好日和
なり氣温も本月最初に於ては八十五六度の
高温を示せしも今や八十度内外に低下せり
職員も生徒も脚草鞋の實習服をよるひ各
自のものを携げ眉には溢るゝ不撓の色を現
はし活潑に而ら沈着に各自の部署に着きぬ
正に是れ勇士戰場に上るの吉日校内闊とし
て三十六峰嵐氣青し
○七月十一日 福島町小學校内に開催せる
信濃教育西筑摩部會に於て安藤校長は評議
員に當選せり

島内教諭に引卒せられ藪原御料林の伐木運
材の實地見學の爲出張終日視察を遂げて夕
刻歸校せり

○六月廿九日入峽せる臺灣學務部長隈本繁
吉氏は安藤校長の案内によりて本校を視察
せるが校長の請により講堂に於て臺灣及朝
鮮の民土風俗及教育等に就きて一時間に涉
る有益なる講演を試みられたり
○夏季實習豫定今夏實習の豫定左の通り發
表せらる

一、事 業

造林地手入、下刈。苗圃作業。農業測量
測樹。登山。

二、期 間

期間は七月廿三日より七月廿六日に至る
十三日間とし其中日曜一日を除きて登山
三日(内日曜一日を含む)造林實習及農業
實習十日とす
(但し午前七時始業正午終業)

三、方 法

造林地手入下刈及び苗圃事業は第一、二
學年生全部を之に充つ
農業實習は第一、二學年中より一組を出
し交互從業せしむ
登山は實習終了後第一、二學年生徒をし
て舉行せしむ
測量及測樹は第三學年全部を以て裏山演
習林施業案編成と共に之を行ふ
以上

咽乾く、足は歩めて、進みやせん、いつろ
此處らが死に場所か
峯近く柳の深林内に凍る許りの冷水に沐し
て天下を見下ろしつゝ、
翠滴り風馨る水は清冽、氣は涼し、婆娑じ
や、焦然大騒ぎ、天は無情とホンかいな
○僕は自らも然か知り人も亦同様に感せら
るゝ一種の癖を以つて居る、但し之れは同
窓の後進にのみ發現する癖で「先輩風が強
し」と云ふのが即ち夫れである
僕は此の先輩風が如何にも校基の安泰に至
大の關係ある大切なるものと思つて居る
社會が進歩し生存競争が猛烈に現實すれば
自衛上何かの名を以て関なるものが現はれ
るのが今世の勢である、曰く薩門閥、帝
大閥、茗溪閥、盛岡閥、亦蘇門閥、何々閥
と口にこう云はざれ各々自己に有利なる方
向に走る處其れが閥である
固より自派のみ庇護援助して他を排擠する
如きは個性より見る時は慚愧に耐へないが
社會の競争場裡に勝つが殖れるかと云ふ利
那に瀕すれば復止むを得ない事と思ふ、僕
の所謂先輩風なるものは木會閥の完全に變
形したものである、誰れでも社會に顔を出
す事一日長ければ夫れ相應に修得したる知
識才能を後進に授ける義務があるではない
か、只管自己のみ順潮に向ひつゝ、あるを誇
り又順潮に向はんをのみ希ふ輩には決して
先輩風が吹け得ない又吹く資格もない、僕

友 林 蘇 岐

は大に先輩風を吹いて大に指導して大に結束して而して其々に社會の上に大々的に奮闘して見たいと思ふ、僕は他の罵倒を包容する雅量が甚だ小さくは無い積りである、然れども親子程も先輩の違ふ後進が先輩を輕視したる言語素振りを見せると大に問詰せにや止まない、之れ社會上當然の禮に背く譯でもあり又母校の爲めに黙過する事が出来ないからである、此の間詰も先輩風の一部には違ひないが、夫れは其半面で僕の所謂先輩風には大なる苦痛が伴つて居る即ち僕は常に後進の爲めに或る種の犠牲を覺悟して居る、例令今我が意見を發表するは時機を得たと思はれても夫れが少しでも後進に崇りが行く様であれば甘んじて黙殺し了した事今迄も一齊で無かつた、而して今後も勿論其の覺悟である、之れが所謂僕の先輩風だ、僕は今我が同窓諸君が一齊に此の覺悟を以て進んで貰ひ度い事を切言せにやならぬ二三の事實を耳にして居る、到敵を控へて鬪牛角上の突き合は淺薄も極まりだ、是等は畢竟要素たる愛と禮とを持てる所謂先輩風を吹かぬから起るのだ

諸君！僕は此の故を以て母校の爲めに己れを捨て、大々的に先輩風を吹かざらんと欲するも得ぬのである、以て如何となすは僕の先輩風必要論の要旨である

○僕は曩日恩師本多博士に扈從して天下に優秀とせられた木曾田立村の名流を賞し且

先生より、森林美學上閑却する能はざる瀧趣味を鼓吹されてから余暇を見て世界的瀧研究に志し先づ各地瀧の繪ハガキを集めん事を企畫した我敬愛せる諸君若し一片の情あらば其の一葉（大小長短と秀と劣とを問はず）を恵み玉へよ！
僕病氣に就き態々御見舞に預りし諸君に御蔭により全癒致し例の通り山男に相化し候に付き御安心被下度茲に御禮申上候
七月五日 下水内郡飯山町客舎にて

謹 告

一、本校々友會規則は段々改正の點も有之候間此度印刷に付し差上候間御覽下され度候
一、下畑君弔慰金及安井、林、川崎、三先生への慰勞金募集は八月末日を以て締切候間申込者にして御送金無之方は夫迄に御送金の程願上候

雜 報

安井書記退職慰勞金申込報告

金五拾錢宛

- 川岸 滋次郎君
- 宮崎 次郎君
- 大嶋 要人君
- 中嶋 眞次郎君
- 高柴 眞一郎君
- 倉科 浦一君
- 家高 忠治君
- 岡田 彌兵衛君

小計五圓

累計貳拾八圓拾五錢

林致論退職慰勞金申込報告

金五拾錢宛

金貳圓

金五圓

- 川岸 滋次郎君
- 家高 忠治君
- 北川 信美君
- 松嶋 平君
- 米山 修君
- 塚本 樹君
- 山本 克行君
- 川口 徳一君
- 奥原 右衛門君
- 岡田 彌兵衛君
- 嶽野 利雄君
- 大宮 二利君
- 中嶋 眞次郎君
- 高柴 眞一郎君
- 倉科 浦一君

金壹圓宛

小計拾五圓

累計四拾壹圓拾五錢

川崎助手慰勞金申込報告

金五十錢

- 津島 九平君
- 北川 信美君
- 米山 修君
- 塚本 樹君
- 山本 克行君
- 川口 徳一君
- 奥原 右衛門君

金貳圓

小計貳圓五拾錢

累計九圓六拾錢

下畑徳十君弔慰金申込報告

金五拾錢

累計七圓五拾錢

- 嶽野 利雄君
- 大嶋 角藏君
- 岡田 彌兵衛君

金壹圓